

ケアは現代社会のさまざまな課題がつながってくる結節点となっている —

私たちは医療といった場合、通常どちらかといえば、急性疾患の類を中心に考えがちですが、実際には（「現代の病」と表現されることもある）精神的・社会的な病気や高齢者ケアがかなりの主要部分を占めるようになっていきます。

広井良典さんが語る

ケア・コミュニティ・自然 ～創造的定常経済システムへの展望～

ケアは、決して1対1の関係で完結するものではなく、むしろ、コミュニティという基盤があってこそ初めて実りのあるものに—

昔の日本には、お寺や神社が核となって、スピリチュアリティと自然が一体となったコミュニティがありましたが、それが、高度成長期において徐々に失われていきました

Sustainable welfare society

経済が成熟する中で、日本社会がどのようなかたちのコミュニティをつくっていけるのかということが、日本社会の中心にある課題のひとつではないか

- I はじめに
- II 医療技術とケアをめぐる展開
- III ケアとコミュニティ
- IV 「持続可能な福祉社会」への展望
- V 「創造的定常経済システム」の視座

広井良典さんが語る

ケア・コミュニティ・自然
～創造的定常経済システムへの展望～

財団法人かながわ国際交流財団 編

〈目次〉

はじめに ～さまざまな課題の結節点としてのケア～

I 医療技術とケアをめぐる展開 6

複雑系としての病 / さまざまなケア・モデル

II ケアとコミュニティ 13

1対1の関係からコミュニティ、自然とのつながりへ / 脳研究の展開に見る「かかわり」の重要性 / 「サイエンス」と「ケア」の分裂、そして「ケアとしての科学」 / コミュニティの意味するもの / コミュニティづくりの事例 / 地理的・空間的な視点としての「福祉地理学」と世代間のつながり

III 「持続可能な福祉社会」の展望 26

「環境-福祉-経済」が相乗効果をもたらす持続可能な福祉社会 / 社会保障の国際比較 / 人生前半の社会保障

IV 「創造的定常経済システム」の視座 33

経済成長を超えて / 定常型社会の方向性と医療モデルの転換 / 多様な創造性を発揮できる定常型社会（創造的定常経済システム） / 労働生産性から環境効率性・資源生産性、そしてケア充足性・ケア創造性へ / グローバル定常型社会とローカルからの出発 / 3度目の定常化の時代 / 価値原理の再構築へ

【組織紹介】

財団法人かながわ国際交流財団 45

【広井 良典（ひろい・よしのり）】

千葉大学法経学部総合政策学科教授 / 公共政策・科学哲学・社会保障論



東京大学教養学部卒業（科学史・科学哲学専攻）、同大学院総合文化研究科修士課程修了（相関社会科学専攻）。厚生省勤務を経て、1996年千葉大学法経学部助教授。2003年より現職、この間2001～02年マサチューセッツ工科大学（MIT）客員研究員。著書に、『日本の社会保障』（エコノミスト賞受賞）、『生命の政治学』『ケア

のゆくえ 科学のゆくえ』『グローバル定常型社会』（以上、岩波書店）、『ケアを問いなおす』『死生観を問いなおす』『持続可能な福祉社会』（以上、筑摩書房）など。2009年、『コミュニティを問いなおす——つながり・都市・日本社会の未来』（筑摩書房）により第9回大佛次郎論壇賞受賞。

※本書は、2009年7月11日（土）に開催された湘南国際村フォーラム「持続可能な社会へ向けて～ケア・コミュニティ・自然～」における広井良典氏の基調講演「ケア・コミュニティ・自然－『持続可能な福祉社会』の展望－」の記録をもとに加筆・修正したものです。

湘南国際村フォーラム「持続可能な社会へ向けて～ケア・コミュニティ・自然～」

主催：財団法人かながわ国際交流財団

協力：神奈川県立保健福祉大学／財団法人地球環境戦略研究機関

後援：国立大学法人総合研究大学院大学

会場：湘南国際村センター（神奈川県葉山町）

はじめに ～さまざまな課題の結節点としてのケア～

私は、学生時代には当初、法学を専攻していましたが、途中から、あまり聞き慣れないといいますが、ややマイナーな分野である、近代科学と人間の関係を考える「科学史・科学哲学」に進みました。その後、研究者になってからも様々な学問分野を渡り歩いてきております。これからのお話も、かなり幅広い話題を扱うこととなりますが、一つのたたき台——果たしてそうだろうかと疑問に感じることもあるかと思いますが——ということで、気軽にお聞きいただければ幸いです。

今回のテーマであるケアについては、私もある程度、いろいろと考えてきましたが、ケアは現代社会のさまざまな課題がつながってくる結節点となっているように思います。ケアというテーマを考えていくと、後でお話させていただくように、自ずとコミュニティというテーマに行き着かざるを得ませんし、また、さらにそのコミュニティは決して宙に浮いて存在しているものではなく、根底には自然があります。ですので、今回のテーマとなっている「ケア・コミュニティ・自然」は不可分のものです。ただ、現代人は、コミュニティや自然から引き離されてしまっている面が多分にあります。そこで今回、コミュニティや自然とのつながりをどのようなかたちで回復していくことができるのか、そしてそこにケアがどのようにかかわってくるのかという根本的な問題について、幾つかの角度から考えていきます。

最初は「医療技術とケア」として、私たちの生活のより身近なところからお話しし、次に「ケアとコミュニティ」について取り上げます。そこではコミュニティに深くかわる「関係性」をキーポイントとして、ケアと近代科学の密接な関係についても触れます。続いて、もう少し大きな社会全体のあり方として、社会保障の話を中心に「持続可能な福祉社会」という社会モデルを考えます。最後に「定常型社会(創造的定常経済システム)」

という視点で、経済成長や量的拡大を目指さない社会のあり方を考えます。このような4つの視点から（1～4に行くにつれて、話がだんだん大きくなっていくというか、ミクロからマクロの視点に移っていきます）、これからの社会像とケアとのかかわりについて見ていきたいと思います。

高齢者や障害を持った人などがゆっくり過ごせる場所がまちの中にあることが、ある意味では医療施設等を造ること以上に重要な意味を持つのではないかと考えられますし、ケアとまちづくりや都市政策とのさらなる結び付きを考えていくことが非常に重要——

持続可能な福祉社会は言い換えると、環境、福祉、経済の3者が相互に補強し合う、あるいは相乗効果を持つような社会モデルということが出来ます。この3者はそれぞれ固有の価値をもつものであり、その一部だけに視野を限定したり、あるいはこれらいずれか(1者または2者)に他を“還元”したりしてはならないのです

これまで、生産性や経済効率性に寄与するものとしての医療、という基本的あるいは暗黙の了解がありました。経済成長が目的ではない定常型社会になっていくと、自ずと医療のあり方も、大きく影響を受けるといえますが、変化していかざるを得ないでしょう。そこから、高齢者ケアをはじめ、さまざまなケアのあり方、医療システムのあり方、さらには医療そのもののあり方について見直されることとなるでしょう

ポスト産業化そして定常化の時代においては、いわば「時間の消費」と呼ぶような、コミュニティや自然等に関する、現在充足的(コンサマトリー)な志向をもった人々の欲求が新たに大きく展開して、福祉、環境、医療、文化、スピリチュアリティ等に関する領域が発展していくことになります。そして、これらはその内容からしてローカルなコミュニティに基盤をおく性格のものであり、その「最適な空間的単位」はまさにローカルなレベルにあると考えられます

進化医学(Evolutionary Medicine)の知見によれば、人間の生物的特性は数万年前から変わっていないことを踏まえ、病気とは、人間をとりまく社会や環境の大きな変化と人間とのズレから生じるものと捉えます。結局、人間の病を規定しているのは環境であり、その環境そのものの中で人間の病が生成するという、エコロジカルな医療の視点です。これから「環境と医療の融合」というテーマが非常に重要になってくる——

現在は、労働生産性が重視されていた時代とはまったく状況が変わり、自然資源が不足して、労働力が構造的に余り、生産過剰で失業が慢性化しています。ですので、これからの時代は、環境効率性に加えて、人を積極的に使う(人手をかけていく)ことが重要であり、労働生産性とは別の価値を求めていくことが必要です